

# 明治の小説

——純情と悲恋の文学——

和田 繁 二 郎

明治の小説とはこの場合、自然主義以前の小説を指す。凡そ二十年代三十年代の小説と思つてもらえばよい。とくに三十年代は自然主義などの新しいものが芽生えてくる時期であるから、明治の小説の典型のようなものは二十年代の硯友社の作品にあるように思える。

従来、硯友社の意義については、「小説神髓」の実践、つまり人情世態風俗の写実を行った点にあるとされている。つまり何を描くかという点で新しいものは認められないが、如何にという点で新しいものを打建てたというのである。しかしこれだけで硯友社の評価が尽されているかどうか疑問に思われる。

当時、硯友社が文壇の中心になり得たのは、ただ写実の新しさのためだけではないと思われる。多くの読者を獲得し得たのは、描き方だけにあったのではあるまい。もっとも、当時は文章と文学とが混同されていた時代だから、描

き方自体におもしろさがあつたことはいなめないが、やはり内容のおもしろさがあつたと思われる。

この内容のおもしろさは、ちよつと考えてみれば、古い前時代的な義理人情の世態・風俗を当時のまだ新しくない読者がよろこんだところに生まれたものと言ふことになるが、どうもこれだけでは割切れない。

第一、当時、硯友社より古い作家が健在であり、ある程度文壇で勢力をもっていたのである。それにもかかわらず、硯友社がもてはやされたのは、それらの戯作系の作家より、何らかの新しいものがあつたからだと思う。

その新しさとは何か。結論的に言えば、傍題に示した「純情と悲恋」の要素なのだ。これがどれだけ新しいものかは、それまでの作品を眺めてくれば凡そ明らかになると思う。

例えば、江戸末期の「人情本」は男女の情痴の場面を主

眼とするもので、女達の心も純情というよりは、実意の競べあいである。それに、大概、おしまいはハッピーエンドになつている。悲劇ではない。

明治になってからの戯作の滑稽本系統のものは、もともと滑稽を中心とするもので、全篇がおめでたいものだ。純情らしいものはむしろ戯画化され茶化されている。読本系統、草双紙系統のものは、情痴、淫猥、惨忍が主であつて、純情は見失われ、勸善懲惡、因果応報式の大団円をもつて

いる。

政治小説はもともと理想を小説によつて実現しようとしたものであるから、純情の要素はあるが、それは思想的純情で、愛情の世界のものではない。それにハッピーエンドのものが多い。

純情が明確に押し出されて来るのは、十年代末の啓蒙的理想主義の小説である。「世路日記」(十七年)「妹と背かがみ」(十八年)「藪の鶯」(二十一年)などである。これらは当時の青年の生き方を追求したものが、これだけでも新しい。その生き方のなかで純情が背骨として描かれて来ているのである。そして結末はどうかというと、ハッピーエンドになるのが多い。その点、右の「妹と背かがみ」は悲劇的結末になつており、この中では、次の時代に先駆した新しいものだと言えよう。

これらを総合すると、政治小説に至るまで、ハッピーエンドに終らぬもの、つまり悲劇的結末のものは少い。そして、愛情の面で、とくに純情を素材とし、生き甲斐とし、礼讃したものはないと言つてよい。そのようやくあらわれてきたのが、二十年代直前に出た啓蒙的理想主義小説の一群であつた。そして硯友社の時代、二十年代に至つて、この純情と悲恋が小説の中心にあらわれてくるのである。

もっとも、硯友社のすべての作品が、純情と悲恋とを扱つていてというわけではない。比較的この両者を備えているものが多く、しかも、優れた作品にこの種のものが多いというわけである。

例えば、あまり有名でない武田仰天子の「新世帯」、丸岡九華の「茅李」(共に新著百種)を見てみよう。二つとも、純情が押し出されているがハッピーエンドになつて

いる。

さて硯友社の作品をとりあげて、その純情と悲恋の作品を見てゆく訳だが、例えば紅葉の作品には、「二人比丘尼色懺悔」(二二年)「おぼろ舟」「巴波川」(二三年)等がある。いずれも純情と悲恋の文学である。

その他、硯友社の連中のものには、漣山人の「妹背貝」(二二年)柳浪の「残菊」(二二年)眉山の「墨染桜」(二三年)等が代表作としてあげられる。これらいずれも純情

と悲劇の文学である。

このような傾向は、必ずしも硯友社だけではなく、他の作家にも見出し得る。それには先にあげた、逍遙の「妹と背かみ」があるが、有名なものでは、四迷の「浮雲」(一〇—二二年) 逍遙の「妻君」(二二年) 嵯峨の屋の「初恋」(二二年) 鷗外の「舞姫」「うたかたの記」(二三年) 等が注目される。

ところで、これらに見られる純情なるものと、悲劇的なものの結びつきないしは、必然性はどこにあるのか。

一般的に悲劇は、時代社会の平穩な時にあらわれやすい。人々のんきに生きていて、刺戟を求めず、健康な人が人の死を見て、生きていることを切実に自覚し、生きていくことに喜びを感じるのとおなじようなものである。江戸末期の頽廢のなかにあらわれた怪談もその刺戟を極度に官能的に感性化したものである。

明治二十年代という時代も、維新後、ようやく平穩の到来した時期であった。そこに、右のような悲劇の発生が見られたわけである。しかしこのような、時代の平穩のなかで刺戟を求めるといふのは、その人間の生活としては受動的であり、消極的である。みずから内部から改善してゆこうという人間成長の場では、常に平穩はあり得ないといつてよい。時代の平穩から来る悲劇への志向は、いわば、

皮相な世相的現象に他ならない。このようなところから生まれた悲劇には十分な現実の反映もあり得ない。

このような皮相な世相的産物としてあらわれたのが、山田美妙の「武蔵野」(二〇年)「蝴蝶」(二二年)などの諸作だと言える。これらには悲劇のための悲劇という作意が見えずいて、内面的な必然性をもっていない。またこれらの作品には、純情というものは、左程大きな位置をしめてこない。それはどうしてか。

さきに、内部から人間を改変してゆこうという人間の成長ということを行ったが、この時代は、近代的方向へ向つての人間改変の時期であった。ここでは、封建的なるものをしりぞけ、人間性を恢復することを通じて、それが行われつつあった。自由主義、個人主義への道である。その封建的なるものとの闘いにおいて、義理人情の粹の中から人間を解放することは大きな課題であり、その解放の原動力として、封建倫理以前の純一無垢なる愛情や情熱が注目されたのである。ここに純情なるものの時代的な意義がある。

ところが、時代は容易にこのような人間の解放を許さなかつた。純情は頭をもたげ、活動しようとして、常に封建的な壁にぶつつからざるを得なかつた。そして崩壊をよぎなくされた。ここに悲劇の発生がある。このような悲劇の

発生こそ現実の眞実を担い得るものであらう。

この点でさきにあげた紅葉の「色懺悔」などは多分にこの眞実から遠いもので、むしろ美妙に近いものだろう。しかし、「おぼろ舟」あたりからこの現実の反映を示すようになってきていふと言ひ得る。また漣山人の「妹背貝」あたりもすぐれた要素をもっていると言ひ得る。しかし、これらの硯友社の諸作よりも、前述の二葉亭や鷗外の作品の方に、より一層、眞実が滲み出ていることは否定できない。この相違はどこに生まれたものであらうか。

それはやはり、作家自身がその人間の変革を身をもって体験し、その中で、問題を切実にうけとめていったからだとと言える。このことは具体的には文学の実践の上で、著しい出来事としてあらわれた。それはこれらの二葉亭や鷗外がいづれも、文学活動、とくに小説を書くことを放棄してゐることである。硯友社との相違は、この小説を書かなくなつたか、書き続けていったかの一点にあらわれてきていふといつてもよい。

二葉亭や鷗外は、純情を大きな原動力とする人間解放のことが、封建的な俗悪な明治の社会では容易に実現しないことを身をもつて知っていた。しかも彼らは生きることまで放棄することはできなかった。そこに妥協を要請されてくる。ところが、彼らにとつて文学は、現実における眞実

の追求そのものであつた。しかも、理想の実現や可能性の追求をも果さねばならなかつた。そこで、現実面で妥協した彼らは、理想を追求する限り悲劇に行きつかねばならぬ眞実を描くこともし得ず、自分たちの妥協を正當なものとして、肯定的に描き出すこともし得なかつた。ここに彼らの作品の中絶や、創作の放棄が起つてくる。二葉亭が身を売るような思いで官報局につとめたとき、「浮雲」は中絶しなければならなかつた。鷗外は「舞姫」他二作を書いたあと、長く小説の筆をとらなかつた。逍遙さえも、純情と悲劇の問題と無縁ではなかつた。

つまり彼らは純情の問題を自分自身の問題として苦しんだ。その点硯友社の連中には、これを幾分世相風俗的なものとして見る傾が強かつた。そこに、純情を自己の問題としてつきつめる眞実さに欠けるとともに、その代償としてそれをつきはなして、旺盛に形象化することができたのである。

しかし、それでも純情は全く見失われてはいず、また悲劇的結末も用意されているのであるが、まだ残っている古い人情の世界や、人間の類型的な把握は、方法の写実とあいまつて、風俗小説的傾向を強める。そこにあらわれてきたのが西鶴調による「伽羅枕」(三年)や「一人女房」(四年)「三人妻」(二五年)などの諸作であつた。それら

には、純情や悲劇性は稀薄になつていゝわゆる「女ものがたり」という類型になつてくる。したがつて、これらは写実という技巧に新しい進境は示したけれども、内容的に近代性を稀薄にしたということになる。硯友社の作品が人々にあかれ、マンネリズムを示すようになったというのは、このような風俗的傾向をさすものと思われる。

そこで、紅葉はこのマンネリズムを克服するために「心の闇」(二六年)「多情多恨」(一九九年)「金色夜叉」(三〇年)を書いたのであるが、これらの諸作には、再び純情と悲恋が大きく浮かび上つてきている。この点、従来紅葉の代表作としてとりあげられている「伽羅枕」「三人妻」などは、むしろ、その位置を失うべきものではないかと考えられる。

このように見てくると、二十年代の小説の特質として、純情と悲恋はまさに、その中心に位するものと見られる。

とくに、斎藤緑雨が「油地獄」などで、写実は果し得たが、純情を否定的にあつかつたのと思ひあわせると、硯友社の新しさがはつきりするであろう。やはり、写実のみに新しさおもしろさがあつたのではなく、純情と悲恋という時代の人間的な課題を、取りあげたから、おもしろさ、よさが生まれてきたのである。

もう時間が来たので、割愛しなければならないが、透谷

# 落伍者の文学

——啄木論の一視点——

(1)

文学者のさまざまの型のうちに、われわれは一つの顕著な日本の特性として落伍者の文学の系語を措定することができる。それが日本の民族の文学心をつよくひきつける理由は、まだ十分に説明されていないが、伝統的に強力なもので、われわれが文学を受容する際の心理的傾斜として前提されていることは事実である。

落伍者とは、もちろん実生活上のつらい緊張を必要とする戦線からの脱落者である。時代によってその戦斗の種類や内容はさまざまであり、戦斗からの離脱の様相も多様であるが、実生活に敗北した点は共通している。もちろん多くの人々が実生活の上で経験する一般の落伍者はここでは問題にならぬ。そういう落伍者になお文学活動を継続した人々だけを対象にするわけであるが、こうした人々の実生活とその文学的創造的活動とは、内面的に深く結びあ

や露伴の超現実的な世界での純情や悲恋の追求、二十年代末の、深刻小説や観念小説における純情と悲恋、また一葉の初期の小説などこの問題と関連するところは多い。また、明治小説の方法上の特質であるフィクションとこの純情と悲恋との関係なども、興味あるところであるが、また次の機会にお話ししたい。

受贈誌(31・7—32・2)

法政大学文学部紀要 No.3(日本文学篇)一	法政大学文学部
人文科学紀要 第九輯(国文学)Ⅲ	東京大学教育学部
高知大学学術研究報告 第四卷	高知大学
西京大学学術報告人文	西京大学
清泉女子大学紀要 三	清泉女子大学
東洋大学紀要 第六・八輯	東洋大学
滋賀大学紀要 第六号	滋賀大学文学部
金沢大学文学論文集 四文学篇	金沢大学
日本大学世田谷教養学部紀要 第五輯	日本大学世田谷教養学部

# 国崎望久太郎

(2)

っているし、文学の本質を考察する場合にも非常に大事な契機をふくんでいるように思われる。われわれは落伍者の文学の系譜に、もう少し注意を払う必要がある。そこでは顕微鏡によって見られた細胞のように、文学と実生活との関係が、拡大された明らかかな形で示めされていることが多い。文学の面白さには、こうした実生活との関係から喚起される部分が多いことも事実である。

近代の作家を念頭にうかべる時、人生の途中で挫折した人々の数の多いことに痛ましい思いを禁ずることができぬ。自ら生命を絶つた眉山、透谷、龍之介、春月、有島武郎、太宰治をはじめとして、窮迫の中に文学者としての生命を消耗し尽したかに思われる一葉や啄木、葛西善蔵や嘉村磯多等の作家の生体験は、まことに特殊なものであった。中途で挫折したという点では小林多喜二の例があるけれども、